

Title	社会的拒絶への反応性：反応の特質とその規定要因
Author	宮崎, 弦太
Citation	人文研究. 59 卷, p.51-71.
Issue Date	2008-03
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学大学院文学研究科
Description	塩出彰教授：湯川良三教授：細井克彦教授：市川美香子教授：広瀬千一教授：浅岡宣彦教授退任記念号

Placed on: Osaka City University Repository

社会的拒絶への反応性 — 反応の特質とその規定要因 —

宮崎 弦太

近年、社会心理学の分野において、社会的拒絶が人間の心理過程に及ぼす影響に大きな注目が集められている。本稿では、社会的拒絶に対して人が示す反応を検討した実証研究を概観し、それらの反応に関わる心理システムの性質について論考する。先行研究から、社会的拒絶は、情動、認知・知覚、行動のそれぞれの水準で多様な帰結をもたらすことが明らかになっている。他者から拒絶されたとき、情動レベルでは、心理社会的苦痛が喚起され、状態自尊心が低下する。認知レベルでは、社会的情報への感受性が高まり、行動レベルでは、向社会的行動または自己防衛的行動（時には攻撃行動）が増加する。このような知見は、人間の心には社会的拒絶に伴う脅威から自己を守るための反応システムが備わっていることを示唆している。加えて、本稿では、社会的拒絶への反応性の個人差について検討した研究も概観する。拒絶への感受性、愛着スタイル、特性自尊心の影響を検討した研究は、他者からの受容を予期できるかどうか、社会的拒絶の手がかりを検知し、拒絶の脅威に対処する過程を規定することを明らかにしている。最後に、今後の研究の方向性について議論する。

1. はじめに

日々の生活を営む中で、我々の側には常に他者がいる。恋人や親友・友人、家族、先輩や後輩、単なる知人や全くの見知らぬ人。相手との親しさや関わりの深さはそれぞれ異なるものの、我々は常に他者との物理的または心理的な繋がりを求めているように思われる。そして、そのような傾向を顕著に示しているのが、他者との繋がりが脅かされたときの私たち自身の反応である。

我々は他者と関係することを希求するが、実際に関係を構築・維持する過程は常に順調に進むわけではない。恋人からの別れの申し出、親友からの非難、友人のからかい、知人による無視など、他者との繋がりを脅かす出来事は、その程度に差はあるが日常生活の中に遍在している。このような社会的拒絶（social rejection）は、当事者にとって極めてネガティブな体験となる。他者から拒絶されたとき、多くの人は不安や苦痛を感じ、「なぜ相手から嫌われたのか」、「自分のどこが悪かったのか」などと自問自答を繰り返すであろう。自分が関係する相手から拒絶されているのか、それとも受容されているのかということは、私たちが日々の生活を営むうえで大きな関心事の1つである。

1990年代の半ば頃から社会心理学の分野において、社会的拒絶が個人の情動・認知・行動に

多大な影響を及ぼすことに関心が向けられ、人間が有する社会的拒絶への反応性を明らかにするために様々な研究が行われてきている。本稿では、これらの研究を概観することにより、社会的拒絶に対して人が示す反応の特質と規定要因について論考するとともに、今後の研究の方向性を示すこととする。

2. 所属欲求と社会的拒絶

人間は常に他者との物理的・心理的な繋がりを希求する。他者と安定した肯定的関係を構築・維持しようとする人間の欲求は、所属欲求 (need to belong) と呼ばれている (Baumeister & Leary, 1995; Maslow, 1943)。Baumeister & Leary (1995) は、人間が所属欲求を有するように至った進化的背景に言及し、次のように論じている。すなわち、私たちの祖先が生活していた環境下では、他者と関係を構築・維持すること、あるいは集団に所属することは、捕食者からの自己防衛や食料などの資源の確保、また、配偶者の獲得や子孫を世話する際の援助獲得を容易にした。その意味で、他者との関係は個人の生存と繁殖の可能性を高める適応的価値を有しており、そのため、自然淘汰の過程を通して、人間は他者との関係を希求する心性、すなわち所属欲求を持つようになったと考えられる (Baumeister & Leary, 1995)。

したがって、関係相手からの拒絶や所属集団からの排斥は、他者との関係の構築・維持、集団への所属によって得られる恩恵を失うことにつながる。それは原始の社会生活において、自己の生存と繁殖の可能性を直接低下させる極めて大きな脅威であった。もちろん現代社会においては、他者との関係が自己の生存や繁殖に直接に影響することは少なくなっている。しかし、所属欲求は人間の基本的欲求として今日の私たちにも現存しており、それを阻害する社会的拒絶は、例えば、飢えなどのように他の基本的欲求が阻害された場合と同様に、現代社会に生きる我々にとっても極めてネガティブな体験となるといわれている (Baumeister & Leary, 1995)。

社会的拒絶は人間の基本的欲求とされる所属欲求を阻害する。そして、日常生活を振り返ると、他者からの拒絶を経験する頻度は決して少なくなく、またそのような経験によって、普段とは異なる情動を体験し、異なる行動を取ったことを思い浮かべる人は多いと思われる。私たちは社会的拒絶に対してどのような反応を示し、それにはどのような心理機制が関わっているのだろうか。Baumeister & Leary (1995) の論文が提出された後、この疑問に対して様々な理論が提唱され、多くの実証研究が行われてきている。以下では、人が社会的拒絶に対して示す反応を、情動、認知・知覚、行動のそれぞれの水準別に概観し、その後、これらの反応の背後にある心理機制について論じることとする。

ところで、これから概観する先行研究では、社会的拒絶に対応するものとして、拒絶 (rejection)、排除 (exclusion)、排斥 (ostracism)、対立 (conflict)、批判 (criticism) など、多岐にわたる事象が取り上げられている。これらの事象は、その対象者に関係相手からの低い関係性評価

(low relational value) が伝達されるという共通点を有している (Leary, 2001)。つまり、いずれの行動も、「他者が自分との関係を価値あるもの (valuable)、重要なもの (important)、あるいは親密なもの (close) とみなしていない」(Leary, 2001, p.6) ことをその対象者に伝える。そこで本稿では Leary (2001) に倣い、社会的拒絶を「低い関係性評価を伝える他者の行為」と広く定義する。この定義によって、先行研究で検討されてきた様々な行為を社会的拒絶という枠組みから検討可能になると考えられる。

3. 社会的拒絶への反応性

他者からの拒絶を経験したとき、私たちの心理過程には大きな変化が生じる。先行研究を概観すると、他者からの拒絶に対して私たちは、特定の情動を経験し、ある種の情報への注意を高め、また、特有の行動傾向を示すことが明らかになっている。以下では、情動・認知・知覚・行動のそれぞれの水準ごとに社会的拒絶への反応を検討した代表的な研究を紹介する。

3-1. 情動レベルの反応

社会的拒絶によってネガティブな情動が喚起されることは多くの研究者によってこれまでに指摘されてきている (e.g., Bowlby, 1973)。その中で近年、社会的拒絶との関連から理論化がなされ、体系的な実証研究が行われているものが心理社会的苦痛 (social pain) と状態自尊心 (state self-esteem) である。

3-1-1. 心理社会的苦痛の喚起

他者からの社会的拒絶に伴って身体的苦痛が喚起されたときと同様の変化が脳内に生じることが、先行研究によって実証されている (Eisenberger, Lieberman, & Williams, 2003)。苦痛は、怪我などの自己の生存に対する危険に伴って喚起され、状況からの離脱や状況改善に向けた行動を動機づけるという意味で適応的な情動である。Eisenberger & Lieberman (2004) や MacDonald & Leary (2005) によれば、苦痛は元来、身体への脅威を検知した際のみ喚起されていた (i.e., 身体的苦痛) が、群れの中で生活する社会的動物においては、他者 (他個体) と関係を維持できるか否かは、個人 (個体) の生存と密接に関連していた (Bowlby, 1969/1982; Baumeister & Leary, 1995も参照)。そのため、身体的脅威を検知した際に身体的苦痛を喚起するのと同じ脳内メカニズムが利用され、社会的拒絶という関係への脅威によっても苦痛 (i.e., 心理社会的苦痛) が喚起されるようになったと主張されている。

例えば Buckley, Winkel, & Leary (2004, Study 2) の実験では、参加者は、マイクを通して実験相手に自己紹介を行い、自己紹介を聞いている相手の評価 (参加者のことをどの程度知りたいと思うか) が5回フィードバックされた。このフィードバックによって相手からの拒絶・受容とその変化パターンが操作され、その結果、受容から拒絶へと評価が変化した場合、つま

り、相手からの関係性評価の低下を経験した参加者は、他の条件よりも強い心理社会的苦痛 (e.g., 傷ついた、痛い) を経験したと自己報告することが明らかとなっている。

そして Eisenberger et al. (2003) は、機能的磁気共鳴像 (functional magnetic resonance imaging: fMRI) を用いた研究において、社会的拒絶を経験する際に活性化される脳部位について検討している。実験参加者は、仮想のゲーム場面 (Cyberball – Williams, Cheung, & Choi, 2000) で他の 2 人の参加者たちから拒絶 (あるいは受容) されるという経験をした。このゲームは、コンピューター画面上で 3 人の参加者同士で 1 つのボールをパスしあうというもので、拒絶条件では最初の数試行を除いて参加者にはボールが全くパスされず、受容条件では、参加者は他の 2 名の参加者と同等の割合でボールをパスされた。そして、拒絶・受容を経験している際の脳部位の活性化の程度を fMRI によって観測したところ、受容条件と比較して拒絶条件において、脳の背側前帯状皮質 (dorsal anterior cingulate cortex: dACC) が有意に活性化していること、また、dACC の活性化の程度は、ゲームの終了時に自己報告された苦痛 (distress) の程度と有意な正の相関関係にあることが明らかとなった。dACC は身体的苦痛の喚起に関与することが知られているため (e.g., Reinvill, Duncan, Price, Carrier, & Bushnell, 1997)、この知見は、身体的脅威を検知した際に身体的苦痛が喚起されるのと同一の脳内メカニズムによって、他者との関係への脅威を検知したときに心理社会的苦痛が喚起されることの傍証とみなされている。このような脳内メカニズムの共有は、他者との関係の構築・維持が自己の生存可能性と密接に関わっていたことを示唆しており、Baumeister & Leary (1995) の所属欲求の進化的起源に関する説明に妥当性を与えている。

3-1-2. 状態自尊心の低下

社会的拒絶への情動レベルの反応は、自己に対する一時的な評価感情 (i.e., 状態自尊心) においても認められる。Leary ら (Leary & Baumeister, 2000; Leary, Tambor, Terdal, & Downs, 1995) によって提唱されたソシオメーター理論 (sociometer theory) によると、状態自尊心は、関係相手からの拒絶・受容の程度の主観的な指標として機能するとされる。すなわち、関係相手から拒絶された場合、自己に対するネガティブな評価感情が生じ (i.e., 状態自尊心が低下し)、それによって相手との関係の状態が悪化していると個人にフィードバックされる。このように拒絶・受容の程度によって状態自尊心が一時的に変動することで、個人は常に他者との関係の状態をモニターし、拒絶の手がかりを迅速に検知することが可能になると考えられている (Leary & Baumeister, 2000; Leary et al., 1995)。他者からの拒絶によって状態自尊心が低下するという関係は、多くの研究によって実証されている (Leary, Cottrell, & Phillips, 2001; Leary, Haupt, Strausser, & Chokel, 1998; Leary et al., 1995)。

例えば、Leary et al. (1995, Study 3) では、5 人 1 組で実験が行われ、拒絶条件の参加者には、他の参加者が自分を集団成員として選ばなかったと伝えられた。一方、受容条件の参加者には、集団成員として選出されたことが伝えられた。実験の結果、拒絶を経験した参加者は

他の条件の参加者よりも、現在の自分についてどのように感じているかを測定する状態自尊心項目（e.g., 良い－悪い、価値のある－価値のない、重要な－重要でないなど）の得点が低くなることが明らかになっている。

また Leary et al. (1998, Experiment 4) の実験では、参加者は、自分の自己紹介に対して実験相手が抱いた印象をフィードバックされた。これらの印象は、参加者に対する(1)極めて否定的な印象（e.g., みじめな）から(9)極めて肯定的な印象（e.g., 信頼できる）までの9個のカテゴリーで構成され、参加者は、それぞれのカテゴリーが呈示されたときに、自分に対する感情（i.e., 良い－悪い）を評定するように求められた。カテゴリーごとに状態自尊心の得点をプロットした結果、相手からの否定的印象が強まるほど状態自尊心は低下し、またその傾向は、相手のどちらかといえば肯定的な印象（9段階の中の6）が中立的な印象（9段階の中の5）に変化し、それが比較的否定的な印象（9段階の中の3）になるという過程で顕著であった。これらの知見は、他者との関係性が自己に対する評価感情をも規定することを示しており、社会的拒絶が高次の情動にも影響することを物語っている。

3-2. 認知・知覚レベルの反応

社会的拒絶を経験したとき、情動レベルの反応に加えて、周囲の環境の中のどの情報に注意を向けるかという認知・知覚過程にも変化が生じる。社会的拒絶への認知・知覚レベルの反応を検討したのが Gardner と Pickett らによる研究（Gardner, Pickett, & Brewer, 2000; Pickett, Gardner, & Knowls, 2004; レビューとしては、Pickett & Gardner, 2005）である。Gardner と Pickett らは、他者から拒絶され所属欲求が阻害された場合、その欲求と関連する情報（i.e., 社会的情報）を選択的に処理する心理システムが活性化するとし、これを社会的モニタリングシステム（social monitoring system－以下では SMS と記述する）と呼んだ（Pickett et al., 2004; Pickett & Gardner, 2005）。社会的拒絶に伴って SMS が活性化することで、他者からの受容・拒絶の手がかりなどの社会的情報への注意が高まり、それによって、多様な情報が存在する環境の中で、所属欲求の再充足のために必要な情報が選択的に抽出されるようになる（Pickett et al., 2004）。これらの情報を利用することで、受容的な手がかりを發する他者（e.g., 笑顔の人）に接近し、拒絶的な他者（e.g., しかめ面の人）を回避するなど、所属欲求の再充足に向けた効率的な行動が導かれると考えられている（Pickett & Gardner, 2005）。

SMS の働きを実証した研究として、例えば、Gardner et al. (2000, Experiment 1) の実験では、参加者は、コンピューター上のチャット場面において、他の会話者たちから拒絶（あるいは受容）を経験した後、ある人物が書いたとされる日記を読み、その内容についての偶発再生が求められた。その結果、拒絶条件の参加者は受容条件の参加者と比較して、日記に記述された社会的情報（i.e., 筆者が他者と関係する中で生じた出来事）に関する記憶成績が増すことが明らかになっている。一方、非社会的情報（i.e., 筆者に生じた個人的な出来事）については

条件間で記憶成績に差は認められていない。このような記憶バイアスは、他者からの拒絶に伴って社会的情報に対する選択的な情報処理が導かれた結果と考えられる (Gardner et al., 2000)。

また Pickett et al. (2004, Study 2) は、他者からの拒絶体験が、文字や言語という媒体で呈示される明示的な社会的情報だけでなく、非言語的の手がかりという非明示的な社会的情報への感受性にも影響することを明らかにしている。参加者は、過去の拒絶体験、受容体験、学業での失敗体験のいずれかを想起した後、音声ストロープ課題 (vocal stroop task) によって、音調 (vocal tone) という非言語的の手がかりへの注意バイアスの程度が測定された。実験の結果、過去の拒絶体験を想起した条件においてのみ、単語の意味と音調が不一致な場合 (e.g., ポジティブな意味の単語がネガティブな音調で呈示) に意味を判断するまでの反応潜時が遅くなることが示され、単語の音調に注意がより向けられることが明らかになっている。他者が発する非言語的の手がかりは、他者との円滑な相互作用を進行するうえで欠くことのできない情報であり、したがって、社会的拒絶によって非言語情報への注意が高まることは、他者と良好な関係を構築・維持するうえで適応的な反応であるといえる (Pickett & Gardner, 2005)。

3-3. 行動レベルの反応

社会的拒絶は行動レベルでも様々な反応を引き起こす。他者から拒絶されたときにどのような行動が喚起されるは、その後の対人関係過程に直接影響する。そのため、社会的拒絶への行動レベルの反応はこれまでに大きな注目を集めてきた。先行研究を概観すると、社会的拒絶に伴う行動パターンの変化は、所属欲求の再充足行動の増加と自己防衛行動の増大の2つに大別できる。

3-3-1. 所属欲求の再充足

心理学における欲求という概念の基本原則に従うと、ある欲求が阻害されるとき、その欲求を再充足するような行動が動機づけられる。Baumeister & Leary (1995) は、所属欲求も同様の原理に従うと考え、社会的拒絶によって所属欲求が阻害されたとき、その欲求を再充足する行動、すなわち、自分を拒絶した相手との関係を修復する行動、あるいは新たな関係を構築するための行動が増加すると主張している (Leary et al., 1995; Williams, 2001も参照)。実際、社会的拒絶の手がかりが検知された場合、自己の利益よりも関係相手および関係自体の利益を優先させる関係志向的行動や、好意の獲得のために自分の意見・行動を他者に合わせる同調行動、また、他者との円滑な相互作用を可能にする行動模倣など、他者からの受容を促進するような行動が導かれることが明らかになっている (Lakin & Chartrand, 2003; Maner, DeWall, Baumeister, & Schaller, 2007; Williams et al., 2000; Williams & Sommer, 1997)。

例えば、Williams & Sommer (1997) は、社会的拒絶が集団課題への個人の貢献の程度に及ぼす影響を検討している。この実験で、拒絶条件の参加者は、ボール遊びの中でこれから一緒に課題を行う他の2名の参加者 (実際には実験者があらかじめ用意したサクラであった) か

らの無視 (i.e., ボールがパスされない) を経験した。一方、受容条件の参加者には、サクラたちから均等にボールがパスされた。その後、サクラたちと行う課題において、課題遂行のための努力の程度と実際の課題遂行量が測定された。その結果、拒絶条件の参加者は、個別に行う課題よりも集団で行う課題において、課題遂行のためにより努力したと自己報告し、また実際の課題遂行量がより多くなることが明らかとなった (ただし、課題遂行量についての結果は女性の参加者のみに認められている)。このような傾向は受容条件では認められていない。集団成員からの拒絶を経験した場合、自己が課題遂行に貢献する価値のある人物であることを示し、他の成員から再度受容されるため、集団課題への動機づけが高まったと考えられる (Williams & Sommer, 1997)。なお、男性において実際の課題遂行量が増加しなかった点について、Williams & Sommer (1997) は、拒絶への対処方略に性差があった可能性を指摘している。つまり、女性と比較して男性に対しては、自己の感情状態を表出しないことを望ましいとする社会的規範が存在し、そのため、拒絶に伴うネガティブな感情を制御することで拒絶に対処した。その結果、拒絶の効果が緩和され、課題遂行量への影響が認められなかったと推測している。ただし、拒絶後の関係志向的あるいは関係修復的行動の増加については性差が報告されていない研究が多く (e.g., Lakin & Chartrand, 2003; Maner et al., 2007)、また、拒絶に対する情動レベルの反応についても基本的に性差は報告されていない (e.g., Buckley et al., 2004; Leary et al., 1995)。したがって、Williams & Sommer (1997) の解釈の妥当性を判断するためには更なる研究が必要であるが、この研究は、他者から拒絶された場合、所属欲求の再充足行動とは別の、感情制御という対処がなされる可能性があることを示唆している。この点については後で再び言及する。

次に、拒絶後に所属欲求の再充足行動が増加することを検討した別の研究として、Williams et al. (2000, Study 2) は、上述の Cyberball の手続きを利用して社会的拒絶が同調行動に及ぼす影響を検討している。インターネット上で行われたこの実験で、参加者は Cyberball において他の 2 名の参加者たちからの拒絶 (あるいは受容) を経験した後、別の 5 名の参加者たちと知覚課題を行った。この知覚課題において、他の 5 名の参加者の誤った回答への同調傾向が測定され、その結果、受容を経験した参加者と比較して拒絶を経験した参加者のほうが、新たな集団成員の誤った回答により同調することが明らかとなった (平均誤回答率は、拒絶条件で 27%、受容条件で 18% であった)。これは、社会的拒絶によって所属欲求が阻害されたとき、新規な関係を円滑に築くために相手への同調を示し、それによって所属欲求を再充足しようとすることを示唆している (Williams et al., 2000)。これらの行動の変化は、関係相手の自己に対する評価を高め、関係の修復・再構築を促進するという点で、適応的な反応であるといえる (Williams & Govan, 2005)。

3-3-2. 自己防衛

上記の反応とは逆に、社会的拒絶によって他者との関係の悪化を招くような行動が増加する

ことも知られている。社会的拒絶はそれを経験する者の状態自尊心を低下させ、また、心理社会的苦痛を喚起する。したがって、自己にとって多大な脅威となる (MacDonald & Leary, 2005)。このような自己への脅威に対して人は、自己防衛という行動を取ることがある。すなわち、関係相手からの拒絶を経験したとき、例えば相手を非難することでその評価の妥当性を低下させたり、相手に対して攻撃的に振舞うことで脅威の対象から距離を置いたりする。これらの自己防衛行動によって、自己に更なる脅威が及ぶこと、つまり、関係相手から再び拒絶されて更にネガティブな情動を体験することを回避しようとするのである (MacDonald & Leary, 2005; Sommer, 2001)。

例えば、Bourgeois & Leary (2001) の実験では、チームのキャプテンがその成員を選出するという過程で拒絶と受容が操作され、拒絶条件の参加者は、キャプテンから1番最後に選出された。一方、受容条件の参加者は1番最初に選出された。この操作の後、参加者はキャプテンを評価するように求められ、その結果、受容条件と比較して拒絶条件において、キャプテンの好ましさや楽しさ、そしてリーダーシップ能力がより否定的に評価されることが明らかとなっている。好ましさや楽しさを低く評価することで、キャプテンから受容されることの価値を低下させ、それによって拒絶の衝撃を低減することができる。また、リーダーシップ能力を低く評価することで、キャプテンが自分に対して行った評価自体の妥当性を低下させることが可能になる。これらの行動によって、拒絶という脅威から自己を防衛しようとしたと考えられる (Bourgeois & Leary, 2001)。

また Buckley et al. (2004, Study 1) は、社会的拒絶が自分を拒絶した相手への攻撃的反応に及ぼす影響を検討している。参加者は、実験相手に自己紹介を行った後、相手の評価がフィードバックされた (強い拒絶的反応～強い受容的反応の5段階)。その後、参加者には、実験相手が課題を行う際の環境音を設定する機会が設けられ、設定した音の不快感の程度によって攻撃行動が測定された。実験の結果、相手から強い拒絶的反応がなされた場合、中立および受容的反応がなされた場合よりも、相手が課題を行う際に不快な環境音を呈示すること、つまり攻撃的に反応することが明らかとなっている。現在のところ、社会的拒絶に伴う攻撃行動の増加に関しては必ずしも統一的解釈がなされていないが (Leary, Twenge, & Quinlivan, 2006)、1つの解釈として、社会的拒絶後の攻撃行動は自己に苦痛を与える対象からの防衛反応であると考えられている (MacDonald & Leary, 2005)。これらの行動の変化は、その対象との関係を悪化させる可能性を高めるという点で不適応な反応である (Williams & Govan, 2005)。しかし、自己防衛行動は自己への更なる脅威を回避できる可能性を高め、その意味で、自己を取り巻く環境の中で常に安心感 (felt security) を保とうとする私たちにとって、欠くことのできない対処方略の1つといえる (Murray, Holmes, & Collins, 2006)。

3-4. 社会的拒絶への反応の背後にある心理システム

以上にみたように、他者から拒絶された場合、当事者の情動、認知、行動には大きな変化が生じる。これらの社会的拒絶への反応にはどのような心理システムが関わっているのだろうか。先行研究で提示された種々の知見、その背景にある諸理論を統合すると、社会的拒絶への個々の反応は、拒絶の手がかりを検知し、拒絶への対処を動機づけ、そして実際に対処過程が起動するという心理プロセスの中に位置づけることができる。

社会的拒絶への一連の反応過程は、他者との相互作用過程の中で拒絶の手がかりが検知されることによって開始される。このような検知過程には、常に他者との関係の状態をモニターし、拒絶の手がかりを検知した際にその状態を自己にフィードバックするシステムが必要となる。これらの過程に関与するのが心理社会的苦痛と状態自尊心という情動であるといえる。つまり、社会的拒絶に伴う心理社会的苦痛の喚起と状態自尊心の低下 (e.g., Eisenberger et al., 2003; Leary et al., 1998) は、拒絶された個人にとって、関係相手との繋がりへの脅威が生じていることを警告するシグナルとして機能する (Eisenberger & Lieberman, 2004; Leary & Baumeister, 2000)。

このような情動の変化は、状況の改善に向けた対処を動機づけ、認知・知覚、そして行動レベルでの対処過程が起動する (MacDonald & Leary, 2005; Pickett & Gardner, 2005)。まず、認知・知覚レベルにおいて、SMS が活性化して社会的情報が選択的に処理されるようになり (e.g., Pickett et al., 2004)、所属欲求を再充足するために他者が利用可能かどうか、また、欲求の再充足を妨げる他者が存在するかどうかなど、環境内の所属に関連する手がかりが精査される。そして、SMS を通して得られた手がかりに基づき、行動レベルの対処が誘引され、所属欲求の再充足行動 (e.g., Williams & Sommer, 1997)、または、自己防衛行動 (e.g., Bourgeois & Leary, 2001) という対処行動が導かれる。前者の行動パターンは、良好な関係の修復・再構築を促進することで他者との繋がりへの脅威を解消し、後者は、他者との関係から離脱することで自己に更なる脅威が及ぶことを回避する (Murray et al., 2006)。これらの対処過程を経て社会的拒絶に伴う脅威が低減すれば、社会的拒絶への一連の反応プロセスが終了し、他者との関係の状態をモニターする過程へと再び移行すると考えられる (Pickett & Gardner, 2005)。

ただし、上記の反応過程とは符合しないと考えられる知見も存在する。例えば、Twenge, Catanese, & Baumeister (2003) は、将来他者から拒絶されることを予期させられた参加者は、感情システムを遮断し、無感情状態になることを明らかにしている。これは、心理社会的苦痛の喚起や状態自尊心の低下が拒絶の手がかりの検知過程に関わるとする議論 (Eisenberger & Lieberman, 2004; Leary & Baumeister, 2000) と一致しない。また、将来の拒絶を予期させられた参加者は、高次の知的課題の成績が低下し (Baumeister, Twenge, & Nuss, 2002)、自己破壊的な行動が増加する (Twenge, Catanese, & Baumeister, 2002) など、所属欲求の再

充足および自己防衛のいずれとも関連性が低い反応を示すことも明らかになっている。そしてこれらの反応は、自己の行為を自身の意志によって統制する自己制御 (self-regulation) 能力が社会的拒絶によって弱体化したために生じるとされている (e.g., Baumeister & DeWall, 2005)。

以上に挙げた知見は、本稿で提示したものと異なる社会的拒絶への反応過程の存在を示唆している。しかしながら、これらの知見を上述の反応過程の中に位置づけることも可能である。つまり、社会的拒絶に伴う苦痛という自己への脅威に対して、感情を遮断することでその脅威から自己を防衛し (Twenge et al., 2003)、感情制御に心的資源が投入された結果、その資源が枯渇し、同一の資源を用いて行われる自己制御過程一般が阻害されたと解釈することができる (Baumeister & DeWall, 2005)。また、拒絶後の攻撃行動の増加についても同様に、心的資源が枯渇した結果、攻撃反応を抑制する自己制御能力が弱まったと解釈できるが (e.g., Leary et al., 2006)、これも感情システムの遮断という自己防衛反応の帰結と考えることができるだろう。

拒絶を検知した際の感情状態の変化が、どのような条件下で、他者に向けられた対処行動 (i.e., 関係修復行動と関係離脱行動)、あるいは、感情システムの遮断を誘引するのにかについては、今後検討すべき課題である。その条件の1つとして、女性と比較して男性は感情システムの遮断という対処を行いやすい可能性が指摘されている (Williams & Sommer, 1997) が、これはまだ推測の域を出ていない。このような研究状況において、一見符合しないように見える知見を含め、これまでに挙げた広範な実証研究を統合できるという点で、本稿で提示した社会的拒絶への一連の反応過程の枠組みは有用であると考えられる。

4. 社会的拒絶への反応性の個人差

上述した社会的拒絶への一連の反応過程は、所属欲求を持つ私たちにとって極めて重要かつ必要不可欠なものである。もしこのようなメカニズムが我々に備わっていなければ、他者と安定した良好な関係を維持することは困難になっていただろう。したがって、社会的拒絶への検知・対処過程は、全ての人に共有されるデフォルトの心理機制であると考えられる。

しかしながら、それぞれの過程の働き方には個人差もある。具体的にいえば、検知過程に関しては、拒絶の手がかりを検知する際の鋭敏性は個人によって異なり、また、対処過程に関しては、社会的拒絶への対処方略、すなわち関係の修復・再構築によって拒絶に対処するか、それとも自己防衛によって対処するかは個人によって異なることが知られている (Downey & Feldman, 1996; Fraley & Shaver, 2000; Murray et al., 2006; Sommer & Rubin, 2005)。一例を挙げると、ある人は友人の何気ない一言によって拒絶されたと感じるが、別の人はその言葉を気にも留めない。また、恋人から拒絶された場合に、相手に向かって怒りを表す人もいれ

ば、自分の悪い点を改めようとする人もいる。このような個人差の存在は、人間が有する社会的拒絶への反応性をより詳細に検討するためには、その規定因を明らかにする必要があることを示している。そこで以下では、社会的拒絶への反応性の個人差を検討した研究を概観し、そのような個人差がどのような要因によって生み出されるのかを考察することにする。

4-1. 拒絶への感受性の影響

社会的拒絶への反応性に関連する直接的な個人差として提唱されているのが拒絶への感受性 (rejection sensitivity) である。拒絶への感受性とは、他者からの拒絶を懸念・予期し、その手がかりを素早く検知し、それに過敏に反応する程度の個人差を表す (Downey & Feldman, 1996)。まず検知過程への影響について、Downey & Feldman (1996, Study 2) は、拒絶への感受性が他者の曖昧な行為の解釈に影響することを明らかにしている。参加者は、実験相手と行うはずであった相互作用が中止になったことが知らされた。このとき実験条件では、実験中止の理由は相手が相互作用を拒否したためであること、統制条件では実験スケジュールの都合であると伝えられた。そして実験の結果、拒絶への感受性が高い人のみ、統制条件よりも実験条件で相手から拒絶されたと感じたことと自己報告することが明らかになっている。実験相手の相互作用継続の拒否は、必ずしも相手からの拒絶を意味せず、したがって、拒絶への感受性が高い人は、複数の解釈が可能な他者の行為に直面した場合、それを相手からの拒絶と解釈しやすいことをこの結果は示している。また Downey & Feldman (1996, Study 3) の調査研究では、拒絶への感受性が高いほど、無神経ではあるが複数の解釈が可能な恋人の行動 (e.g., 恋人があまり自分と時間を過ごさなくなった) に対して、それが自分を傷つけるために意図的になされたものと帰属しやすいことが明らかになっている。これらの知見は、拒絶への感受性が高い人は低い人と比較して、他者の曖昧な行為に対しても被拒絶感が強まることを示しており、したがって、拒絶の手がかりを検知する際の閾値が低いといえる。

拒絶への感受性の相違は、対処過程にも影響することがわかっている。Ayduk, Downey, Testa, Yen, & Shoda (1999, Study 1) の実験では、拒絶への感受性が社会的拒絶と攻撃行動間の連合強度に及ぼす影響が連続プライミング-発音課題 (sequential priming-pronunciation task) を用いて検討され、拒絶への感受性が高い人は低い人と比較して、拒絶関連語 (e.g., 見捨てられる、裏切られる) がプライミングされたときの攻撃関連語 (e.g., 叩く、傷つける) への反応潜時が速いことが明らかとなっている (なお、参加者は女性のみであった)。拒絶への感受性の高い人は、社会的拒絶に関わる思考が活性化したときに攻撃行動への接近可能性が高まることをこの結果は示している。また Ayduk et al. (1999, Study 2) は、Downey & Feldman (1996, Study 2) と類似した実験手続きを用いて、実験相手との相互作用の中止の理由を操作し、それが相手への評価に及ぼす影響を検討したところ、拒絶への感受性が高い人のみ、統制条件よりも実験条件で相手のことをより否定的に評価すること (e.g., 相手に好感

をもてない)を明らかにしている。これらの知見は、拒絶への感受性が高い人は低い人と比較して、他者から拒絶された際に、相手に対する攻撃や非難という自己防衛行動 (MacDonald & Leary, 2005)が増加することを示しており、したがって、他者からの拒絶を検知した際に自己防衛的な対処方略を用いやすいといえる。

このような拒絶への感受性の個人差は、なぜ生まれるのだろうか。Downey & Feldman (1996)は、幼年期の養育者との相互作用過程を通して形成された予期が、拒絶への反応性の違いを生み出す中心的な役割を果たすと論じている (Levy, Ayduk, & Downey, 2001も参照)。具体的には、拒絶への感受性が高い人は、養育者への要求場面 (e.g., 一緒にいて欲しい)において、養育者に要求を拒絶されるという過程を繰り返し経験し、それを一般化することで、他者は自分の要求に対して拒絶的に反応するという予期を形成している。そのため、自己の要求場面で他者から拒絶されることを強く警戒し、拒絶の手がかりを検知する際の閾値が低くなる (Downey & Feldman, 1996)。また、実際にその手がかりに直面した場合、それを関係相手が自己に苦痛を経験させるため意図的に行ったと解釈し、その対処として相手を攻撃するなどの自己防衛的な方略が用いられやすいとされる (Levy et al., 2001)。

4-2. 愛着スタイルの影響

上述したように、Downey & Feldman (1996)は、拒絶への反応性の個人差が生み出される要因として養育者との関係を挙げた。この点は、愛着理論 (attachment theory)をめぐると一連の研究からも多くの証左が得られている。Bowlby (1973)によれば、個人が有する愛着スタイルは、乳幼児期において愛着他者 (主に養育者となる母親)が自己の必要時に利用可能であったか、自己の欲求に適切に応答したかという経験に大きく左右される。愛着他者が受容的であったか、それとも拒絶的であったかという相互作用経験を一般化し、対人関係への特性的な予期が形成されることで、対人関係における情動、認知、行動に特有のパターンが生じると考えられている (Mikulincer & Shaver, 2007も参照)。現在、愛着スタイルの個人差は愛着不安と愛着回避という2つの次元から捉えられており、愛着不安が強い人は、他者との関係において自己の価値を低く評価し、したがって他者から受容されることを確信できず、他者から拒絶されることを強く警戒する。愛着回避が強い人は、対人関係の中で他者に不信感を抱き、他者と親密な関係を築くことを回避しようとする。これに対し、愛着不安と回避がいずれも低い人は、他者との関係の中で自己の価値を高く評価し、また他者への信頼感が強く親密な関係を積極的に構築しようとする (Brennan, Clark, & Shaver, 1998)。社会的拒絶への反応性との関連についてみると、愛着不安と回避のいずれか (または両方)が強い不安定な愛着スタイルの人は安定した愛着スタイルの人と比較して、検知過程においては社会的拒絶の手がかりへの鋭敏性が高く (Campbell, Simpson, Boldry, & Kashy, 2005; Collins, Ford, Guichard, & Allard, 2006; 金政, 2005)、対処過程においては拒絶に対して自己防衛的な対処を選択しやす

い (Kachadourian, Fincham, & Davila, 2004; Mikulincer, 1998; Sharfe & Bartholomew, 1995) ことが明らかになっている。

まず検知過程への影響については、金政 (2005) が愛着スタイルと他者の表情認知との関係について検討している。参加者は、ポジティブ、ネガティブ、ニュートラルのいずれかの感情を表出した他者の顔面表情を呈示され、それぞれの表情について、その感情状態 (e.g., 軽蔑、幸せ、恐怖) を推測するように求められた。実験の結果、愛着不安の強い人は弱い人と比較して、他者のネガティブな表情からより強い拒絶感情 (i.e., 軽蔑、嫌悪、怒り) を読み取ることが明らかとなっている。また Campbell et al. (2005) は、日誌法を用いた恋人関係の調査において、愛着不安の強さが関係相手との対立の認知に及ぼす影響を検討し、愛着不安が強いほど日常生活の中で恋人との対立がより多く生じていると知覚すること、そしてこの傾向は、恋人が知覚した対立の量を統計的に統制しても得られることを明らかにしている。これは、愛着不安が強い人が、恋人が対立とは捉えていないような出来事さえも、2人の食い違いを表す手がかりと検知していることを意味しており、拒絶の手がかりの検知を促進する知覚バイアスを有していることを示唆している (Campbell et al., 2005)。愛着不安の強い人は弱い人と比較して、他者から受容されることに確信がもてず、他者から拒絶されることを強く警戒する。そのため、相互作用過程において、他者のネガティブな表情や関係相手との対立などに含意される拒絶の手がかりをより鋭敏に検知すると考えられる (Campbell et al., 2005; Fraley & Shaver, 2000)。

次に対処過程への影響に関しては、Mikulincer (1998, Study 5) が、愛着スタイルが他者に信頼を裏切られたときの対処行動に及ぼす影響を語彙判断課題 (lexical decision task) を用いて検討し、信頼が裏切られる場面 (e.g., 私は関係相手を信頼していたが、彼 [彼女] は私を傷つけた) がプライミング刺激として呈示された場合、愛着回避が強い人は弱い人と比較して、離脱 (escape) という行動への反応潜時が速く、また話し合い (talk) という行動への反応潜時が遅いことを明らかにしている。この結果は、裏切りという他者からの拒絶に直面した際に、愛着回避が強い人は相手との関係を修復するよりも、相手との関係から離脱するという自己防衛的な対処を用いやすいことを示唆している。また、Sharfe & Bartholomew (1995) は、愛着スタイルと関係相手のネガティブな行動に対する対処方略との関連を質問紙調査によって検討し、愛着回避と不安が共に高い人ほど、恋人のネガティブな行動 (e.g., 恋人が自分にひどいことを言った) に対して、無視や離脱という関係破壊的な行動を取りやすいこと、一方、愛着回避と不安が共に低い人ほど、話し合いという関係修復的な行動を取りやすいことを明らかにしている。不安定な愛着スタイルを持つ人、特に愛着回避が強い人は、対人関係において他者への信頼感が低く、他者に依存することができない。そのため、他者からの拒絶という脅威に直面した場合、他者との関係を修復・再構築することによって脅威を低減できるとは期待せず、脅威の源泉となる関係自体から離脱することで安心感を得ようとする、自己防衛的な対

処方略が優先されると考えられる (Mikulincer & Shaver, 2003)。

4-3. 特性自尊心の影響

拒絶に対する反応の個人差と関連する要因として、早くから注目され検討されていたのが特性自尊心 (trait self-esteem) である。Leary et al. (1995) によれば、特性自尊心は関係相手にとっての自己の一般的な価値評価を表している。状態自尊心が特定の他者からの受容・拒絶によって一時的に変動するのに対して、特性自尊心は過去の受容・拒絶体験を通して形成された恒常的な価値評価である (Leary & Baumeister, 2000)。つまり、特性自尊心の高い人は、他者からの受容をこれまでに多く経験しており、これらの経験を一般化して、自己の価値を常に高く評価している。一方特性自尊心の低い人は、多くの拒絶体験に伴って、自己の価値を常に低く評価している。そして社会的拒絶への反応性との関連についてみると、特性自尊心が低い人は高い人と比較して、検知過程では社会的拒絶の手がかりを検知する際の閾値が低く (Nezlek, Kowalski, Leary, Blevinsm & Holgate, 1997; Murray, Bellavia, Rose, & Griffin, 2003; Murray, Rose, Bellavia, Holmes, & Kusche, 2002)、また、対処過程では他者から拒絶された際に自己防衛的な対処方略を用いやすい (Murray et al., 2002, 2003; Sommer, Williams, Ciarocco, & Baumeister, 2001) ことが明らかになっている。

まず検知過程への影響について、Murray et al. (2002, Study 2) は、特性自尊心によって関係相手からの拒絶を検知する際の鋭敏性が異なることを示している。この実験では、恋人からの拒絶の予兆が操作され、実験条件の参加者には、現在の恋人との関係について尋ねられたアンケート調査のフィードバックとして、恋人が参加者に対して不満を持っているかもしれないと実験者から伝えられた。一方、統制条件ではそのようなフィードバックは与えられなかった。その結果、特性自尊心が低い人のみ、統制条件よりも実験条件において、恋人から現在受容されている (または、これからも受容される) という感覚 (e.g., 相手は無条件に自分を受け入れ、愛してくれている; 自分が相手に嘘をついたとしても、相手は許してくれる) が弱いことが明らかになっている。また Murray et al. (2003) は、日誌法を用いた配偶者関係の調査において、配偶者の関係性評価のメタ認知 (i.e., 配偶者が自分との関係をどの程度価値あるものとみなしているかの認知) が相手の行為の解釈に及ぼす影響を検討している。なお、特性自尊心が低いほど、特定の関係相手 (e.g., 配偶者) の関係性評価を低く認知することが明らかになっている (Murray, Holmes, & Griffin, 2000)。そして調査の結果、関係性評価を低く認知している人は、日々の生活の中で配偶者がネガティブな気分を経験している場合、相手からの被拒絶感 (e.g., 相手は自分を理解していない、相手は自分に怒っている) が強まるという知見が得られている。これらは、特性自尊心の低い人は高い人と比較して、まだ実際には関係相手から拒絶されていないにもかかわらず、また、相手のネガティブな気分の原因が必ずしも自分にあるわけではないのに、相手からの被拒絶感が強まることを示しており、したがって、

他者の行為を拒絶の手がかりと検知する際の閾値が低いといえる。特性自尊心の低い人は、他者にとっての自己の価値を恒常的に低く認知しており、他者との相互作用過程の中で相手から拒絶されることを常に警戒している (e.g., Murray et al., 2002)。このため、他者の行為に関する情報処理過程で拒絶の手がかりを看過しないように、その鋭敏性が高まると考えられる (e.g., Murray et al., 2003)。

次に対処過程への影響については、Murray et al. (2002, Study 3) が、関係相手からの拒絶を検知したときの対処行動が特性自尊心によって異なることを明らかにしている。この実験では、参加者に対する恋人の評価が操作され、実験条件の参加者には、一緒に実験に参加している恋人が参加者の嫌いなところを多く挙げていることが暗黙裡に伝えられた。一方、統制条件の参加者には、このような低い関係性評価は伝えられなかった。その結果、特性自尊心の低い人のみ、統制条件と比較して実験条件で恋人の性格をより否定的に評価することが明らかになっている。また、上述した Murray et al. (2003) の調査研究においては、相手からの拒絶を検知した際の対処行動が関係性評価のメタ認知によって異なることも検討され、関係性評価を低く認知している人は、日々の生活の中で相手からの被拒絶感が強まった場合、相手への攻撃的な行動 (e.g., 相手を侮辱する; 相手を無視する) が増加するという傾向が認められた。一方、関係性評価を高く認知している人は、被拒絶感が強まった場合に相手への親近性を強めるなど関係志向的行動が増加する傾向が認められている。これらの知見は、特性自尊心の低い人は高い人と比較して、関係相手から拒絶された際に、相手に対する非難や攻撃という自己防衛行動が増加することを示しており、他者からの拒絶を検知した際に自己防衛的な対処を行いやすいといえる。特性自尊心の低い人は、他者からの受容に関して自信が相対的に弱いため、他者から拒絶されたときに関係の修復・再構築が可能であるという期待は抱きにくく (Sommer & Rubin, 2005)、またその試みによって相手から再び拒絶され苦痛を経験することを懸念する (Murray et al., 2006)。そのため、関係の修復・再構築よりも自己防衛が優先的な対処方略となると考えられる (Murray et al., 2006)。

4-4. 社会的拒絶への反応性の規定因

以上の知見を総合すると、拒絶への感受性が高い人、不安定な愛着スタイルを持つ人、特性自尊心の低い人は、いずれも、他者からの拒絶を過去に繰り返し経験し、その経験が一般化されることで、現在および将来の対人関係場面においても自分は他者から拒絶されるという予期を抱いているといえる (Baldwin, Fehr, Keedian, Seidel, & Thomson, 1993; Downey & Feldman, 1996; Sommer & Rubin, 2005)。すなわち、他者からの受容を過去にどの程度経験し、それによって他者一般からの受容を予期できるかどうか、拒絶への反応性を規定する重要な要因となっていると考えられる。

他者一般からの拒絶を予期することは、社会的拒絶への反応過程に次のような影響を及ぼす

と考えられる。すなわち、他者との相互作用場面において拒絶を予期することによって、当該個人の所属欲求は常に阻害された状態にある。所属欲求が阻害された状況では一般的に、他者からの受容・拒絶の手がかりをモニターする傾向が強まる (Pickett & Gardner, 2005) が、他者からの拒絶を予期し、拒絶を強く警戒することは、他者の行為に関する情報処理過程で、拒絶の手がかりを見逃さないようにその手がかりへの鋭敏性を高める (e.g., Downey & Feldman, 1996)。そして、実際に拒絶の手がかりが検知されると、それは元々充足されていなかった所属欲求が更に阻害されることを意味し、多大な心理的苦痛と状態自尊心の低下をもたらす (Murray et al., 2006)。同時に、他者が自分のことを受け入れてくれないと予期しているため、関係を修復・再構築することによって脅威に対処することができず、脅威の源泉から離脱するというように自己防衛的に対処する傾向が強まると考えられる (Mikulincer & Shaver, 2003)。

一方、他者からの受容を過去に繰り返し経験し、他者一般からの受容を予期することは、社会的拒絶への反応過程に次のような影響を及ぼすと考えられる。すなわち、他者との相互作用場面において受容を予期することによって、当該個人の所属欲求は常に充足された状態にあり、また、その予期を確証・維持しようとする情報処理バイアスが生まれるため (Murray et al., 2006)、拒絶の手がかりへの鋭敏性は低くなる (e.g., Murray et al., 2003)。加えて、他者から受容されることを予期しているため、拒絶の手がかりが実際に検知されたとしても、自己が他者から再び受け入れられることを期待し、所属欲求を再充足すること、つまり、他者との良好な関係を修復・再構築することで、他者との繋がりへの脅威に対処する傾向が強まると考えられる (Murray et al., 2006)。

当然のことながら、社会的拒絶への反応性を規定する要因は他にも考えられる。例えば、Williams & Govan (2005) は、拒絶に対する行動反応を規定する要因として、統制感というもの挙げている。Williams & Govan (2005) によれば、他者からの拒絶は、周囲の環境を自己が統制不可能な状況をもたらすため (e.g., 他者に話しかけても無視をされる)、所属欲求だけではなく統制欲求 (control need) も阻害する (Williams, 2001も参照)。そして、阻害された統制欲求を再充足するため、攻撃などの他者に自分の存在を認めさせるような挑発的な行動が増加すると主張している。実際、拒絶された後に統制感が回復するような操作がなされた参加者は、攻撃反応が増加しないことが Warburton, Williams, & Cairns (2006) によって実証されている。しかし、統制感という要因のみでは、上述した3つの個人差変数の影響は説明しにくく、また、統制感が規定するのは攻撃行動の有無という特定の範囲に限られている。その意味で、これまでに蓄積されている社会的拒絶への反応性の個人差に関する知見を統合的に解釈可能にし、加えて、検知過程と対処過程の双方への影響を予測できるという点で、他者からの受容予期という要因は、社会的拒絶への反応性に関わる極めて重要な要因といえるだろう。

5. 今後の研究に向けての課題

以上に概観したように、私たちが社会的拒絶の手がかりをどのように検知し、また、他者から拒絶されたときにどのように対処するのかという点について、これまでの研究から多くのことが明らかにされている。また、社会的拒絶への反応性には個人差があり、特に他者からの受容をどの程度予期できるかが重要な規定因となっていることも示されている。ただし、人間が有する社会的拒絶への反応性をより広範に理解するためには、まだ検討すべき課題も残されている。

他者との関係は一定の状態に留まっているわけではなく、関係の進展、停滞、悪化などその状態が変動する可能性を常に有している (Knapp & Vangelisti, 2004)。したがって、社会的拒絶への反応性も相手との関係の状態に応じて変化すると考えられる。

事実、社会的拒絶への反応性の主要な規定因と考えられる関係相手からの受容予期は、相手との関係の進展度によって変化する可能性が示唆されている。Reis & Shaver (1988) によると、関係の親密化は、相互の自己開示とそれに対する肯定的反応が繰り返されることを通して、自己の最も深い内面 (innermost self) が、関係相手から理解され (understood)、支持され (validated)、関心をもたれている (cared for) という感覚が増大する過程であると論じられている。このような、自己の内面について相手が示す理解、支持、そして関心の知覚は、他者の自己に対する関係性評価を高く認知する基盤となり (Leary & Baumeister, 2000)、関係相手からの受容予期も強まると考えられる。そして上述のように、関係相手からの受容予期が検知過程と対処過程の双方に影響するのであれば、関係の進展度によって、特定の他者との関係における社会的拒絶への反応性が変化することは十分考えられる。実際、関係の進展過程の中で、特に相手との関係がより親密なものへと移行する過程 (e.g., 知人から友人になる) において、関係相手から受容されることへの関心が高まり、拒絶の手がかりにより鋭敏になることを示唆する知見も存在する (Lydon, Jamieson, & Holmes, 1997)。

しかしながら、社会的拒絶への反応性の規定因を検討した研究は、上述の個人差に注目したものが大勢を占め、特定の他者との関係の状態に着目した研究はほとんど行われていないのが現状である。個人が持つパーソナリティ特性および個人と他者との関係の性質という2つの観点から拒絶への反応を検討することで、例えば、どのような状況下でどのような人が拒絶の手がかりに鋭敏になり、また自己防衛的な対処方略を用いやすいのかなど、社会的拒絶への反応機制的規定因についてより詳細に検討することが可能になるだろう。そのため、これまでにあまり注目されてこなかった関係要因という視点を導入することは重要であると考えられる。

6. 結 語

私たちは他者との関係を欠いては生きていけない存在である。しかし、他者との関係は、多くの幸福をもたらすと同時に、苦痛の源泉ともなる。事実、他者からの拒絶は状態自尊心の低下や心理社会的苦痛の喚起という少なからぬ脅威を自己にもたらす (e.g., Eisenberger & Lieberman, 2004; Leary & Baumeister, 2000)。しかし、他者からの受容を予期することで、拒絶の手がかりに鋭敏になる必要性は低下し (e.g., Downey & Feldman, 1996)、また、たとえ拒絶されたと感じても、相手との関係修復を促進するような行動が誘引される (e.g., Murray et al., 2003)。このような反応機制は、他者との良好な関係が維持される可能性を高めるだろう。Baumeister & Leary (1995) が論じるように、受容を予期できる他者との関係を営むことは、我々の精神的安寧にとって極めて重要であるといえる。

【謝辞】

本稿の執筆にあたりご指導いただきました池上知子先生（大阪市立大学大学院文学研究科・教授）に、心より感謝申し上げます。

【引用文献】

- Ayduk, O., Downey, G., Testa, A., Yen, Y., & Shoda, Y. (1999). Does rejection elicit hostility in rejection sensitive women? *Social Cognition*, 17, 245-271.
- Baldwin, M. W., Fehr, B., Keedian, E., Seidel, M., & Thomson, D. W. (1993). An exploration of the relational schemata underlying attachment styles: Self-report and lexical decision approaches. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 19, 746-754.
- Baumeister, R. F., & DeWall, C. N. (2005). The inner dimension of social exclusion. In K. D. Williams, J. P. Forgas, & W. von Hippel (Eds.), *The social outcast: Ostracism, social exclusion, rejection, and bullying*. (pp. 53-73.). New York: Psychology Press.
- Baumeister, R. F., & Leary, M. R. (1995). The need to belong: Desire for interpersonal attachments as a fundamental human motivation. *Psychological Bulletin*, 117, 497-529.
- Baumeister, R. F., Twenge, J. M., & Nuss, C. K. (2002). Effects of social exclusion on cognitive processes: Anticipated aloneness reduces intelligent thought. *Journal of Personality and Social Psychology*, 83, 817-827.
- Bourgeois, K. S., & Leary, M. R. (2001). Coping with rejection: Derogating those who choose us last. *Motivation and Emotion*, 25, 100-101.
- Bowlby, J. (1969/1982). *Attachment and loss: Vol.1. Attachment*. New York: Basic books.
- Bowlby, J. (1973). *Attachment and loss: Vol.2. Separation: Anxiety and anger*. New York: Basic books.
- Brennan, K. A., Clark, C. L., & Shaver, P. R. (1998). Self-report measurement of adult romantic attachment: An integrative overview. In J. A. Simpson & W. S. Rholes (Eds.), *Attachment theory and close relationships* (pp. 46-76.). New York: Guilford Press.
- Buckley, K. E., Winkel, R. E., & Leary, M. R. (2004). Reactions to acceptance and rejection: Effects of level and sequence of relational evaluation. *Journal of Experimental Social Psychology*, 40, 14-28.
- Campbell, L., Simpson, J. A., Boldry, J. & Kashy, D. A. (2005). Perception of conflicts and support in romantic relationships: The role of attachment anxiety. *Journal of Personality and Social Psychology*, 88, 510-531.

- Collins, N. L., Ford, M. B., Guichard, A. C., & Allard, L. M. (2006). Working models of attachment and attribution processes in intimate relationships. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 32, 201-219.
- Downey, G., & Feldman, S. I. (1996). Implications of rejection sensitivity for intimate relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, 70, 1327-1343.
- Eisenberger, N. I., & Lieberman, M. D. (2004). Why rejection hurts: A common neural alarm system for physical and social pain. *Trends in Cognitive Sciences*, 8, 294-300.
- Eisenberger, N. I., Lieberman, M. D., & Williams, K. D. (2003). Dose rejection hurt? An fMRI study of social exclusion. *Science*, 302, 290-292.
- Fraley, R. C., & Shaver, P. R. (2000). Adult romantic attachment: Theoretical developments, emerging controversies, and unanswered questions. *Review of General Psychology*, 4, 132-154.
- Gardner, W., Pickett, C. L., & Brewer, M. B. (2000). Social exclusion and selective memory: How the need to belong influences memory for social events. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 26, 486-496.
- Kachadourian, L. K., Fincham, F., & Davila, J. (2004). The tendency to forgive in dating and married couples: The role of attachment and relationship satisfaction. *Personal Relationships*, 8, 373-393.
- 金政祐司 (2005). 自己と他者への信念や期待が表情の感情認知に及ぼす影響—成人の愛着的視点から—
心理学研究, 76, 359-367.
- Knapp, M. L. & Vangelisti, A. L. (2004). *Interpersonal communication and human relationships (5th Ed.)*. Boston, MA: Allyn and Bacon.
- Lakin, J. L., & Chartrand, T. L. (2003). Using nonconscious behavioral mimicry to create affiliation and rapport. *Psychological Science*, 14, 334-339.
- Leary, M. R. (2001). Toward conceptualization of interpersonal rejection. In M. R. Leary (Ed.), *Interpersonal rejection* (pp.3-20.). New York: Oxford University Press.
- Leary, M. R. & Baumeister, R. F. (2000). The nature and function of self-esteem: Sociometer theory. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in experimental social psychology* (Vol.32, pp. 1-62.). San Diego, CA: Academic Press.
- Leary, M. R., Cottrell, C. A., & Phillips, M. (2001). Deconfounding the effects of dominance and social acceptance on self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, 81, 898-909.
- Leary, M. R., Haupt, A. L., Strausser, K. S., & Chokel, J. T. (1998). Calibrating the sociometer: The relationship between interpersonal appraisals and state self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74, 1290-1299.
- Leary, M. R., Tambor, E. S., Terdal, S. K., & Downs, D. L. (1995). Self-esteem as an interpersonal monitor: The sociometer hypothesis. *Journal of Personality and Social Psychology*, 68, 518-530.
- Leary, M. R., Twenge, L. M., & Quinlivan, E. (2006). Interpersonal rejection as a determinant of anger and aggression. *Personality and Social Psychology Review*, 10, 111-132.
- Levy, S. R., Ayduk, O., & Downey, G. (2001). The role of rejection sensitivity in people's relationships with significant others and valued social groups. In M. R. Leary (Ed.), *Interpersonal rejection* (pp.251-289). New York: Oxford University Press.
- Lydon, L. E., Jamieson, D. W., & Holmes, J. G. (1997). The meaning of social interactions in the transition from acquaintanceship to friendship. *Journal of Personality and Social Psychology*, 73, 536-548.
- MacDonald, G. & Leary, M. R. (2005). Why does social exclusion hurt? The relationship between social and physical pain. *Psychological Bulletin*, 131, 202-223.
- Maner, J. K., DeWall, C. N., Baumeister, R. F., & Schaller, M. (2007). Does social exclusion motivate interpersonal reconnection? Resolving the "porcupine problem." *Journal of Personality and Social*

- Psychology*, 92, 42-55.
- Maslow, A. H. (1943). A theory of human motivation. *Psychological Review*, 50, 370-396.
- Mikulincer, M. (1998). Attachment working models and the sense of trust. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74, 1209-1224.
- Mikulincer, M., & Shaver, P. R. (2003). The attachment behavioral system in adulthood.: Activation, psychodynamic, and interpersonal processes. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in experimental social psychology* (Vol.35, pp. 52-153.). San Diego, CL: Academic Press.
- Mikulincer, M., & Shaver, P. R. (2007). *Attachment in adulthood*. New York: Guilford Press.
- Murray, S. L., Bellavia, G. M., Rose, P., & Griffin, D. W. (2003). Once hurt, twice hurtful: How perceived regard regulates daily marital interaction. *Journal of Personality and Social Psychology*, 84, 126-147
- Murray, S. L., Holmes, J. G., & Collins, N. L. (2006). Optimizing assurance: The risk regulation system in relationships. *Psychological Bulletin*, 132, 641-666.
- Murray, S. L., Holmes, J. G., & Griffin, D. W. (2000). Self-esteem and quest for felt security: How perceived regard regulates attachment processes. *Journal of Personality and Social Psychology*, 78, 478-498.
- Murray, S. L., Rose, P., Bellavia, G. M., Holmes, J. G., & Kusche, A. (2002). When rejection stings: How self-esteem constrains relationship-enhancement processes. *Journal of Personality and Social Psychology*, 83, 556-573.
- Nezlek, J. B., Kowalski, R. M., Leary M. R., Blevins, T., & Holgate, S. (1997). Personality moderators of reactions to interpersonal rejection: Depression and trait self-esteem. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 23, 1235-1244.
- Pikett, C. L. & Gardner, W. I. (2005). The social monitoring system: Enhanced sensitivity to social cues as an adaptive response to social exclusion. In K. D. Williams, J. P. Forgas, & W. von Hippel (Eds.), *The social outcast: Ostracism, social exclusion, rejection, and bullying*.(pp. 213-226.). New York: Psychology Press.
- Pikett, C. L. & Gardner, W. I., & Knowls, M. L. (2004). Getting a cue: The need to belong and enhanced sensitivity to social cues. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 30, 1095-1107.
- Reinville, P., Duncan, G. H., Price, D. D., Carrier, B., & Bushnell, M. C. (1997). Pain affect encoded in human anterior cingulate but not somatosensory cortex. *Science*, 277, 968-971.
- Reis, H. T., & Shaver, P. (1988). Intimacy as an interpersonal process. In S. Duck (Ed.), *Handbook of personal relationships* (pp.367-389). Chichester. England: Wiley.
- Sharfe, E., & Bartholomew, K. (1995). Accommodation and attachment representations in young couples. *Journal of Social and Personal Relationships*, 12, 389-401.
- Sommer, K. (2001). Coping with rejection: Ego-defensive strategies, self-esteem, and interpersonal relationships. In M. R. Leary (Ed.), *Interpersonal rejection* (pp. 167-188.). New York: Oxford University Press.
- Sommer, K. L., & Rubin, Y. S. (2005). Role of social expectancies in cognitive and behavioral responses to social rejection. In K. D. Williams, J. P. Forgas, & W. von Hippel (Eds.), *The social outcast: Ostracism, social exclusion, rejection, and bullying*.(pp. 171-183.). New York: Psychology Press.
- Sommer, K.L., Williams, K.D., Ciarocco, N.J., & Baumeister, R.F. (2001). When silence speaks louder than words: Explorations into the intrapsychic and interpersonal consequences of social ostracism. *Basic and Applied Social Psychology*, 23, 225-243.
- Twenge, J. M., Catanese, K. R., & Baumeister, R. F. (2002). Social exclusion causes self-defeating behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 83, 606-615.
- Twenge, J. M., Catanese, K. R., & Baumeister, R. F. (2003). Social exclusion and the deconstructed state: Time perception, meaninglessness, lethargy, lack of emotion, and self-awareness. *Journal*

- of *Personality and Social Psychology*, 85, 409-423.
- Warburton, W. A., Williams, K. D., & Cairns, D. R. (2006). When ostracism leads to aggression: The moderating effects of control deprivation. *Journal of Experimental Social Psychology*, 42, 213-220.
- Williams, K.D. (2001). *Ostracism: The power of silence*. New York: Guilford Press.
- Williams, K. D., Cheung, C., & Choi, W. (2000). Cyberostracism: Effect of being ignored over the Internet. *Journal of Personality and Social Psychology*, 79, 748-762.
- Williams, K. D., & Govan, C. L. 2005 Reacting to ostracism: Retaliation or reconciliation? In D. Abrams, M. A. Hogg, & J. M. Marque (Eds.), *The social psychology of inclusion and exclusion*. (pp. 47-62.). New York: Psychology Press.
- Williams, K. D. & Sommer, K. L. (1997). Social ostracism by one's coworkers: Does rejection lead to loafing or compensation? *Personality and Social Psychology Bulletin*, 23, 693-706.

【2007年9月13日受付, 9月28日受理】

How do people react to social rejection? —The nature of reactions and their determinants.—

MIYAZAKI Genta

In recent years, social rejection has been receiving more attention in social psychology. This article reviews and integrates a vast number of empirical studies that addressed how people react to social rejection and investigates the nature of psychological system for dealing with rejection. The existent literature indicates that social rejection produces a variety of consequences at affective, cognitive/perceptual, and behavioral levels. When a person is being rejected, she/he experiences social pain and lowered state self-esteem at the affective level, enhanced sensitivity to social information at the cognitive level, and manifests increased prosocial, self-defensive, or even aggressive behaviors at the behavioral level. These suggest that human mind is equipped with a response system to protect itself against threats from social rejection. This article also reviews researches that focused on individual difference variables in response to rejection: rejection sensitivity, attachment style, and trait self-esteem. This revealed that the degree to which people expect to be accepted by others determines the way how they detect signals of rejection and cope with threats of rejection. Finally future research directions are discussed.